

精神身体的状態が顎顔面部における  
圧痛閾値測定結果に及ぼす影響について

○石谷徳人<sup>1)</sup> 吉原俊博<sup>1)</sup>  
舛元康浩<sup>2)</sup> 山崎要一<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 鹿大・院医歯・口腔小児

<sup>2)</sup> ますもとけんこう歯科 (伊万里市)

【緒言・目的】当科では顎関節症などの口腔顔面痛を有する患者の治療・管理を行っており、その中で重要な検査項目に、顎顔面領域の筋の触診がある。しかしながら、筋の触診の再現性には多くの技術的な問題があるだけでなく、患者個人の精神身体的状態の影響も少なからず関与しているものと思われる。そこで今回我々は、健常成人に対し、精神身体的状態を2種類の心理テストで測定し、さらに再現性を可能な限り向上させた圧痛計を用いて、茎状突起部に対する圧痛閾値測定を行い、精神身体的状態が顎顔面部における圧痛閾値測定結果に及ぼす影響について調査した。

【対象と方法】被験者は健常成人20名(男性10名と女性10名;平均年齢26.3±2.5歳)である。被験者に対し同時刻から2種類の心理テスト(STAI, POMS)を実施し、引き続き疼痛感受性の高い部位とされている左右側の茎状突起部に対し、各5回ずつ圧痛計にて圧痛閾値を測定した。得られた心理テストの各項目の尺度と各被験者の圧痛閾値の変動係数(CV値)との相関を検討した。

【結果と考察】茎状突起部における圧痛閾値のCV値とSTAI, POMSの計5つの項目の尺度に有意な正の相関が見られた。以上の結果から、不安や抑うつ、疲労傾向の強い人ほど圧痛閾値の測定値にばらつきがやすいことが示された。口腔顔面痛を有する患者は、少なからず精神面の問題を伴うことがあり、精神身体的状態は十分配慮すべきであるが、歯科領域における心理テストの活用においては他科領域の疾患との鑑別診断の点からも、今後さらなる検討が必要であると感じた。